

ソーラーグレンジング

環境に配慮し乱開発せず、
純国産エネルギーと食料の自給率を上げる

環境に配慮した
新しい畜産の形
「白糠モデル」

再

生可能エネルギー事業などを手掛ける「株式会社町おこしエネルギー」は、白糠町で太陽光発電施設を整備し、ソーラーパネルの下で羊、それ以外のスペースで馬を飼育する「ソーラーグレンジング（太陽光発電＋放牧）」を行います。

11月7日、ソーラーグレンジングの取り組みについて、白糠町と町おこしエネルギーが役場で記者懇談会を開催しました。懇談会では、全国に1000店舗以上ある業務スーパーの創業者で「町おこしエネルギー」の沼田昭二会長兼社長が、次のように話しました。

今、日本の畜産業は酪農業も含めて非常に厳しい状況にあります。

特に北海道の場合、頑張つて牧草地がつくられてきたのに畜産業が厳しいため、次へ引き継いでいくことができず、広大な面積の耕作放棄地や遊休地が増えています。これが一番の問題です。

ソーラーグレンジングは、この耕作放棄地や遊休地に太陽光発電を設置し、純国産エネルギーを増やすとともに、放牧により農地を再生させるダブルメリットの事業で、今後、畜産業の方とフランチャイズ化を目指します。

我々太陽光発電側のメリットとしては、耕作放棄地や遊休地を活用しますので、木々の伐採や抜根切土、盛土の乱開発がありません。つまり、土地開発で二酸化炭素を出すことがなく、開発費もかからないのです。この浮いた費用を牧柵や牛舎建築に充てます。その後



も太陽光発電側から支援することでリスクなく畜産をすることができ、業務スーパーと同じようなウインウインの関係ができるのです。

今回の取り組みは、将来のエネルギーや食料問題のほか、ブラックアウトなどの防災危機管理も含めて、公共施設の電力を確保するために地域電力を増やしていくことが必要なことから町が同社に相談。乱開発しないで牧草地が活用できることや昨年4月から始まった太陽光発電の「FIP制度」など、条件が整ったことにより事業化が実現しました。

工事は2期に分けて行われ、第1期は来春に着工し、翌25年秋に稼働、第2期は25年春に着工し、26年秋の稼働を予定しています。



「大規模な事業は自治体との信頼関係がなければできない」と話す沼田会長。掘削技術専門学校を運営するジオパワー学園の理事長も務めています

第1期の建設地は庶路18の1、19の1。総事業費は約30億円で、年間発電量は一般家庭約6000世帯分を見込んでいます。全体面積89ヘクタールに設置するソーラーパネルは敷地面積の1割程度で、その周りに羊を約350頭放牧。牧柵の外側には、耕作放棄地に多いクマ笹を好んで食べる北海道和種（どさんこ）を約50頭放牧します。

第2期は、第1期西側のトールパレット36の13、14の100ヘクタールを町から借りて実施。第1期同様に約30億円の事業費でソーラーグレンジングを整備します。地域電力として、道立広域公園にも電力供給を行う予定。また、将来に向けて道立広域公園候補地内で温泉の試掘も行う予定となっています。